

安静を命ぜられて、病の床に静養を続けています。毎日、ほとんど誰にも会わずに寝ていますと、多くの同朋が次ぎから次ぎと見舞いに来て下さる。もの言わずに一人の同朋とお話をします。又家内や本部の人たちを通して、同朋のうわさが聞こえて来ます。又お手紙が私を見舞うて下さいます。ありがたい御便を頂いては嬉しさのあまり涙します。こうして私の内も外も、御同朋の憶念によつて荘厳されています。

御同朋は如来より給わりたる、私の全てであります。もし私から、全ての同朋を取られたら、私は無内容な無意味なものになります。念仏に生きたもう多くの御同朋は、私のお念仏の全内容であつて、私のための十七願海であります。この御同朋たちは教法の中から生れ、随つて如来大悲誓願海から出現して、しかも私を憶念して下さいます。それ故にまた私の憶念の対象界であります。親鸞聖人が、自らの教法の中から誕生した念仏の人を、御同朋御同行と拝まれた御意を頂くことが出来ます。

朝から晩まで一人で寝ていると、各地の御同朋達が、次々に現れて来て私に語りかけます。そして私に念仏させて下さいます。時には一人で笑つて見たり、心配事のある同朋の御家庭のことを心配して見たり、喜んだり、悲しんだり、泣いたり、笑つたり、一人で寝ておつても、退屈しないにぎやかなことであります。

わけても、私の心を強くうつものは、各地の同朋の御精進、御讃嘆会のさかんな有様を耳にすることであります。不思議に御同朋のありがたい日日の歩みは、私の耳に入易く、そして私を感動せしめます。学問だけでも駄目、口だけでもだめ、名利心はなお更だめ、唯念仏自然の行歩のみが、大千応感動の事実であります。

憶えば、私の過去三十年の歩みをして、今日あらしめたのも、皆同朋の力強い御念力の賜でありました。どんな事が起きて来ても、私を倒さない、私をやめさせないで、一貫し続けさせた強い力が、同朋の憶念の力であります。御法義を、抽象的な話にしないで、具体的事実として、お示し下さるのが、御同朋の存在であります。それ故に十年も二十年も一貫して変わりなく歩みきつて下さった支部や同朋の存在は、私に取つてはかけがえのない、尊いありがたい至宝であります。

その中にはすでに七十、八十の高齢に達して、遠く本部までは、出かけて下さることの不可能な御同朋があります。私はその地方に行くといふ日だけを、忘れがちな心にも一生懸命でおぼえていて、坂を越えて、お寺に行つてみれば、私は病気で来てをらない。がつかり力を落して涙しながら、お念仏しておられる御老体が思われます。もうこうした御年寄の同朋とは、この世ではお会い出来ないか分らない。しかしお念仏の中で毎日会わせて頂きましょう。そして俱会一処と、お浄土で再会させて頂きましょう。(読者の中で近方にこうしたお年寄がいられる方はここを読んで聞かせて私の心をお伝え下さい)。

しかしかくの如き福智蔵、蓮華蔵界の人生への顕現も、もとに帰せば、如来本願の廻向顕現であります。如来浄土の廻向顕現なればこそ、帝網無尽の憶念の世界がこの世に開けて来るのであります。一南無阿弥陀仏の具体的内容であります。お念仏に一切のお徳がこもって下さるのであります。でありますから我々は、同朋の憶念を受取らして頂いたままが、本仏親様にかえつて、念仏せしめられるのであります。有るものは唯お念仏一つであります。前号の『我等の世界』に於て述べた様に、人間のなものによつて結ばれず、一人ひとりが合掌して所有せず、所有されず、純粹に念仏申すことによつて、如来の本願、眞実信心の貫流によつて、自然に結ばれたところに、この御同朋の世界が開けて来るのであります。

力によつて人を圧伏せず、圧伏されず、各々人格の主体性を確立したままが、同一信に生きて一大ハーモニーの中に生かされているのが、この御同朋御同行の我らの世界であります。御同朋は如来浄土の内眷族、つまり、お浄土の親類であります。この世の親類以上の親類であります。この世の親類だけでは、兄弟だと言つても、年を取れば、段々その間が疎くなり、くれた、くれなんだと、とかく欲心が物を言つて、仲々一つにはなれない。御浄土の親類では、そんな事がものを言わず、如来大悲の血によつて結ばれ、真心と真心とが直接にふれ合い、同一の信、同一の行に生きさして頂くが故に、最も深い心に於て大満足を得るのであります。これは教法の前に、謙虚に頭を下げきつて、同行善知識を発見したものだけが知る喜びであります。

お話に出かけた講師が、帰つて来て、「どいつもこいつも話のわかるやつは一人もおらぬ」と言つたとすれば、それは、聴衆よりも先に、その講師の頭が高かつたのである。お浄土の風に波うつものが、この世の菩薩の草である。御浄土の風を吹かせずして、靡けと言うのは無理である。百千万言の雄弁も謙虚なる一言には及ばない。病床にひびいて来る御同朋たちのたつた一口の言葉が、私を根こそぎゆり動かして、念仏せしめて下さいます。「念を念ずるものは念また念ぜらる」。かくして無尽に念と念が対応するところに、念仏三昧の世界があります。

一行一心専復専、純粹に純粹に念仏申させて頂きましょう。その人は一時は淋しい身の上でも、必ずそのうちに御同朋が恵まれて来ます。粗雑な歩みは、賑かな様でもやがて冬枯れて万古に寂寥を残します。蓮如上人は「我ばかりと思ひ独覚心なることあさましきことなり」と誠められました。切るに切られぬ御同朋を発見させて頂いたのも如来本願の廻向であります。ゆめゆめ同朋同志の間にあつては、目くそ鼻くその善悪ばかり裁く事なく、その善悪の中に光り給ふ念仏を拝ませて頂かねばなりません。もしそのことが出来なければ、一人の御同朋をも得ることは出来ないであります。ああ、今更に御同朋に捧げ奉る如来のみ名。それぞれの持ち場にあつて、念仏一筋に生きてまえかし。(口述筆記)